

第 39 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

今年度の北海道建築賞委員会は、2014 年 5 月 1 日、札幌市内で 2014 年度の第 1 回委員会を開催した。今年度の審査方法を審議し、北海道建築賞の主旨に沿った建築を評価する視点と応募作品に対する審査方法を委員全員で確認した。その後、応募状況を検討し、委員の中で注目に値する作品を「2013 北海道建築作品発表会」や他の発表作品などの情報をもとに議論し、その中から委員からの応募推薦対象作品として 6 作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第 1 回の審査委員会は、5 月 29 日に開催され、応募作品が 6 点に前述の 6 作品の中から実際に応募のあった 4 作品を加えた計 10 作品を今年度の審査対象作品とした。

応募作品及び応募設計者（応募順）：

- ① ホワイトアトリウムハウス（小山将史君／一級建築士事務所小山将史建築設計事務所）
- ②（仮称）十勝地域リハビリセンター新築工事（松村正人君、恒川真一君、綾部圭介君、保久原功君、松浦有子君／大成建設㈱一級建築士事務所）
- ③ 中ノ中ノ庭（岩澤浩一君／id 一級建築士事務所）
- ④ 代々木ゼミナール札幌校（平井浩之君、中藤泰昭君／大成建設㈱一級建築士事務所）
- ⑤ イヌエンジュの家（大杉崇君／ATELIER 02）
- ⑥ 伊達市総合体育館 あかつき（海藤裕司君、菅俊治君／㈱山下設計北海道支店、㈱菅設計企画）
- ⑦ 北海紙管株式会社本社ビル（鈴木理君／㈱鈴木理アトリエ一級建築士事務所）
- ⑧ ちだ歯科クリニック（遠藤謙一良君／㈱遠藤建築アトリエ）
- ⑨ うどんの五衛門（伊達昌広君／㈹伊達計画所）
- ⑩ ふきのとう子ども図書館（安藤敏郎君／㈱安藤敏郎建築設計事務所）

審査における評価の視点は、これまでの北海道建築賞としての選考の視点を崩さずに、計画理論や設計・デザインに対しての新しい挑戦や問題意識、新しい生活・環境の構築を目指した意欲と新たなビジョンの構築に対する「先進性」、自然、環境、人間社会総体を含めた時間的、空間的「規範性」、それらを実現・統合して建築としての高い質を確保することを目指す「洗練度」の 3 項目を共通価値とすることを最初に委員全員で確認した。その後、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料の内容を精査した後、議論を重ね現地審査該当作品（順

不同)として以下の6作品、④代々木ゼミナール札幌校、⑤イヌエンジュの家、⑥伊達市総合体育館 あかつき、⑦北海紙管株式会社本社ビル、⑧ちだ歯科クリニック、⑩ふきのとう子ども図書館が選定された。

現地審査は、委員7名の全員の参加を原則に3回に分けて実施された。7月2日に⑥伊達市総合体育館 あかつき、8月4日に④代々木ゼミナール札幌校、⑤イヌエンジュの家、⑦北海紙管株式会社本社ビル、8月5日に⑧ちだ歯科クリニック、⑩ふきのとう子ども図書館の審査を周辺環境から建築空間の内外まで詳細な観察と、設計者やクライアントからの説明や質疑などを行った。

最終審査会は、8月26日、札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。選考審査は、各委員が各作品に対する見解を述べたのち、候補作品の設計プロジェクトに関与した委員がその後の選考から外れ、候補作品全体について議論、さらには、個々の作品の評価と意義が整理され、長い討議になった。その選考過程で、6作品よりも、④代々木ゼミナール札幌校、⑦北海紙管株式会社本社ビルが選考対象から外れ、4作品に絞られた。その上で、各作品に対して評価と意義を再度吟味した。⑧ちだ歯科クリニックと⑩ふきのとう子ども図書館は、それぞれ特徴的な建築作品であることは、評価されつつも、細部の完成度、洗練度などと言った北海道建築賞の審査基準には届かない部分が散見されるという指摘が大勢を占め、賞の選考より外すことで合意された。さらに、残り2作品に対して詳細な検討に入った。数名の委員から今年度は、作品自体のレベルが例年に比べるとやや低調であるという趣旨の意見も出されたが、本賞には届かないが、建築奨励賞としての基準は十分満たしているとの全員一致の評価より、⑤イヌエンジュの家、⑥伊達市総合体育館 あかつきを本年度の北海道建築奨励賞とした。

「イヌエンジュの家」は、敷地にあったイヌエンジュを取り囲むように住宅部分が配置された一見コートハウスの形式をとっているかのように見える。しかし、中庭に開いた部分だけでなく、多様な開口の取り方による光の取り入れ方や微妙な視線の抜けなどによって、コートハウスというよりそれは、区画や面積はごく一般的な住宅地に建つ住宅に、多様な空間を紡ぎ出すということに重きをおいていると理解できる。今までの北海道の住宅建築が、環境性能重視のボックス型のフォルムが体勢を占める中、このような多孔質で外壁面積が大きな空間を創り出す設計手法は、あえて遺棄されてきたと言える。しかし、環境性能を十分確保できる外壁や開口部、換気システムなどの技術をしっかり活用しながら、本来求められるべきであると作者が考える住宅におけるライフスタイルを享受することへの指向を素直に表現した作品として、

評価できる。

「伊達市総合体育館 あかつき」は、上部に巡らされたポリカーボネートを使ったハイサイドライトより降り注ぐ光で、日中はほとんど照明無しにも十分に競技が出来るほどの光環境を達成しており、スポーツ施設としての快適性が十分に確保されている。同時にそれは、外観に軽やかさを生む仕掛けにもなっている。また、暖房システムは、既に地域で生産されているペレットを使ったボイラーによるものであり、太陽光利用とともに、再生可能エネルギーを適切かつ最大限に利用した環境建築として今後の北海道の建築の一つの方向性を誠実にトレースし、かつ実現している建築である。また、これらの選択は単に環境配慮ということだけではなく、有珠山という活火山を抱える地域において、災害時には地域の避難施設として機能しうる建築の持続可能性を真正面から捉え回答した建築でもある。このように建築に求められる機能を洗練された技術を用いて、地域のニーズに合わせて実現していく公共施設の設計に求められる規範的設計態度は大いに評価できるものである。

今回の建築賞の審査課程で大きな議論になったのは、昨今の建築を取り巻く状況の厳しさと作品に対する設計者の希求の問題である。財政的にも生産コストが圧迫されながらも、建築に希求すべきものは何かということが失われては、作品と呼べる建築は永遠に生まれない。さらに、設計者一人一人の建築への情熱的な取り組みは、単に建築を設計し、デザインする部分のみに拘泥し、耽美的に美的追求のみをしては、到底実現できないだろう。建築の大小、住宅か公共建築かに関わらず、統合的に建築生成のプロセスをデザインすることとは何なのかを一度真剣に考え直すところから、地域に根付く、新しい建築が生まれるのではないだろうか。

現地審査6作品のうち、4作品は残念な結果となったが、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

代々木ゼミナール札幌校：予備校と言えども、一般の教育施設と同様に学生が勉学し、生活をする場所であることは変わらない。「学びの縁側」と名付けられた部分は、本当に学生のための空間なのか。外壁をガラスカーテンウォールで覆うことで懸念される室内環境を確保するためバッファーという外装デザイン優先の判断がそこにはあり、決して学生のための空間とは見えない。予備校産業の転換期の中で建築というプロパティをどう活用するかという企業としてのニーズと、学生の居場所のあり方をどのように結びつけるかという設計者としてのしたたかさが見られなかったところが残念である。

北海紙管株式会社本社ビル：企業のアイデンティティである紙管をファサードにを使って、コーポレート・アイデンティティを表現したファサードが特徴的な建築である。しかし、内部の

オフィス空間は、何の提案も見られない通常の執務室であり、選択した構造形式もオフィス空間としての答えの出し方として適切だったのかは疑問が残る。オフィス空間とファサード、エントランスからの縦動線などから期待する新しさとのギャップが著しく、残念である。

ちだ歯科クリニック：民間の歯科医療を担う施設として、診療室の機能的な配置やそこでの快適性を保つ照明、換気などの室内環境は、大型化する歯科医療環境に対する作者としての熟練した思考と技術の結果として評価できる。また、什器のレイアウト、デザインも技巧的かつ的確である。しかし、機能的であるがために省略され、押し込められたバックヤードのあり方は、働く環境として正しい回答なのかに疑問を残した。

ふきのとう子ども図書館：すでに計画が進んだ中盤から建築家として建設に関わり、しかも財政的な脆弱性などにも立ち向かいながら、施主が求める建築を成立させていったプロセスには、委員全員の賛同を得た。惜しむらくは、障がいを持った子どもが本に触れるという施主が創り出したソフトをどのように建築として翻訳するのかという部分に建築家としての提案が見たかったところである。しかし、このような取り組みが新たな建築として実現したことは、社会にとっては重要な意義を持つことは言うまでもない。

日本建築学会北海道支部 北海道建築賞委員会

主査 小篠 隆生

委員 加藤 誠、久保田 克己、齋藤 利明、鈴木 敏司、平尾 稔幸、山田 深

(文責：小篠 隆生)

第39回 北海道建築奨励賞

大杉 崇 君 「イヌエンジュの家」

札幌市手稲山ふもとの傾斜する宅地の中央に大きなイヌエンジュの木が生えていたのである（イヌエンジュは九州～北海道にみられる豆科の落葉高木で高さ15mほどになりその実はサヤに入っていて食べることもできる）。

この家は、イヌエンジュをコの字型に囲うように、傾斜地に沿って徐々にレベルを上げながら、8畳間ほどの小さな空間が反時計回りに方向を変えつつ連続していく構成となっている。エントランス上部から別れて時計回りに回ると正面2階のアトリエ空間である。中庭に向かってそれぞれの部屋が開いているのではなく、中庭からの光をくまなく取り込んでいるのでもない。むしろ中庭のイヌエンジュは視覚的にも意識的にもところどころに垣間見えるだけで、直接的に眺めたり木陰を楽しむということではなく、その存在を間接的に心のうちに感じながら時を過ごすことを意図しているかのようである。

全体的に独特の空間構成となっているものの、設計者としては奇をてらおうとしたものではなく、イヌエンジュへの想いと土地の気配に対して素直に空間を呼応させていった結果であろうことが感じられる。図面や写真からはわかりにくいですが、場面場面での景色と反射光の光量の変化が秀逸であり、審査員全員が好感をもった心地よさが確かに存在している。

重力換気や断熱やディテールなど現在の北海道における住宅設計のなかで上質なレベルに達しているものの、先鋭的な考え方や傑出した技巧があるわけではない。とらえようによってはきわめてスタンダードな住居と言えなくもなく、流行的ではない安定感があり、むしろ普通であることの大切さを主張しているとも言える。

しかしながら、物理的にではなく無意識的な心の内面においてイヌエンジュの枝の広がりの下に抱かれて暮らすという奥深い感覚を喚起しているという点において、この住まいはとても絶妙に出来ているように思われる。北海道のアイヌの人々はこの木を「チクペニ」と呼び、人間の生きた標（しるべ）としたそうである。大きな木があればそれに寄り添いたいという気持ちや、その下に座りたいという心持ちは、人類が遺伝子的に持ち続けている潜在意識ではなからうか。それをあくまで目ではなく心に感じさせる全体構成である。樹木を強調する空間ではなく、樹木におもねることなく、そっと寄り添い、たまに会話するような空間になっている。

「イヌエンジュは30年前から住んでいた住人であり、この住人とコミュニケーションを育み、30年後が楽しみ」という設計者の想いが、スパイスのようなストレートさではなく、隠し味的

な謙虚さで込められているところがとても魅力的であり、その点においてこの建築を大いに評価するとともに、設計者の環境としての空間づくりの将来性に期待したい。

(文責：平尾稔幸)

第39回 北海道建築奨励賞

海藤 裕司 君 「伊達市総合体育館 あかつき」

東日本大震災以来、災害時における住民の安全確保の関心が以前よりも高まり、また公共施設に求められる役割も大きく変わりつつある。特に日常の施設機能に加えて災害時機能が強く求められる傾向がみられる。公共施設における災害時機能とは、インフラが遮断されても一時的に生活できる環境を確保することであると考えた場合、そのための設備の増大とそれに伴うコスト負担が問題になる。こういった機能は結果的に利用されない可能性もあり、また日常の施設機能にはその恩恵がほとんど感じられないことも多く、過剰設備として議論されることもある。災害時の機能を併せ持つ公共施設のあり方は未だ模索の段階にある。

本計画は東日本大震災以前から計画された市の総合体育館であり、メイン・サブアリーナとプールを併せ持つ複合体は市民の生涯活動の拠点として位置づけられている。一方、災害時にも避難施設として機能することも等しく重要な機能として掲げられている。このように日常の体育施設機能と災害時機能を両立させるという現代的なテーマに対して、本計画では説得力のある解決案が提示されている。具体的にいうと、災害時における建築的な対処技術が日常利用にとっても価値のあるものとなり、またその逆も成り立つことで、トータルとして過剰な設備投資を避けつつ無理のない施設運用を図ることが意図されている。「通常利用から災害利用へのシームレスな移行」という設計者の姿勢からも、本計画における方向性を読み取ることができる。

重要な手法として建築のコンパクト化が試みられている。災害時に避難者の居場所となるメインアリーナと、救護物資保管場所となるサブアリーナを一体化させることで両者を機能的に結びつけるとともに、外壁面積の縮小によってできるだけ暖房エネルギーに頼らない状況をつくりだした。このことは、日常利用時の暖房エネルギー削減や躯体減による建設費削減をもたらした。またエネルギー面については、全ての熱源を地場の木質ペレットによるボイラーとして災害時においても備蓄と域内供給によってまかなう体制を確立している。維持管理をしっかりと行うことで安定した運用を可能にし、その結果他のエネルギーとの2重化による過剰な設備投資を避けることができた。さらに自然光利用の工夫として、メインアリーナのハイサイドライトは日中時に照明不要の避難場所環境をもたらしたが、このことは日常の照明負荷の削減に大きく寄与している。しかしそれ以上に、ポリカーボネート版による拡散光によってスポーツの場にふさわしい均質で明るい光環境を作り出すことに成功している。直射光を遮蔽するディ

テールや自然光拡散を阻害しない架構形式を含め、設計者の工夫が結実している。

以上に見られるように、日常利用と災害時利用の技術を融合させて無駄のない仕組みを構築することが具現化されている。実際の計画に当たっては、市が主催する「総合体育館等建設検討会議」において、スペック、規模、エネルギーなどの方向性が議論されており、その結果ぶれのない強固なコンセプトが導かれたことも成功の要因であろう。

広々とした歴史の杜防災公園に佇む個性的なファサードデザインは、安全性に裏打ちされたシンボルとして新しい風景をつくりだした。市民にとっての公共施設とはどのようなものかという問いに対して、ひとつのモデルを確立した設計者の手腕を高く評価したい。

(文責：加藤 誠)